

〈研究ノート〉

## 留学生対象の研修旅行の意義に関する一考察

齊藤 真理子\*

### The Purpose of the Study Trip in Japan for Foreign Students

Mariko Saito

**要 旨** 本稿では在日留学生対象の研修旅行の意義について考察した。まず、本学国際文化学科日本文化コースの文化・語学研修の意義について学生アンケートを中心に分析し、次に他大学・日本語予備教育の現場・海外技術者研修機関における研修旅行の目的と実施形態を調査分析し、最後に、在日留学生対象の研修旅行の意義について改めて考察し、本学での研修旅行の改善の方向性を探った。研修旅行の意義は、1. 留学生の精神面に対する配慮 2. 日本文化理解（文物・地域全体・人と価値観） 3. 日本語の応用 4. 研究のための資料探しに分類される。そして、これらの意義を踏まえた上で、1. 留学生のみを対象とするのではなく、日本人学生の希望者も参加できるようにすること、2. 希望者には勉学の場でのホームステイを紹介すること、3. 長期ホームステイ参加を奨励し、単位取得を可能にすること、4. ホームステイにおける家庭生活の理解という意義を明確に示すこと、5. 交流会での種々の活動を日本語科目の内容と結び付けることなどの改善の方向性を示した。

#### 1. はじめに

文化女子大学文学部国際文化学科は、欧米文化コース、アジア文化コース、日本文化コースの3コースからなり、それぞれのコースの3年次にコース必修の課目として文化・語学研修が設けられている。欧米文化コースの学生は、約1か月アメリカでホームステイをしながら、昼間は英語の学校に通ったり近郊の文化施設を見学したりする形で研修し、アジア文化コースの学生は、3週間ほど中国で大学の寮に宿泊しながら、昼間は中国語を学んだり近郊の文化施設を見学したりする形で研修している。欧米・アジア両コースとも日本人学生対象のコースであり、日本で学んできた言語・文化に現地で直に触れるという意義は大きく、学生たちも自分の実力を試したり、伸ばしたり、またはもっと伸ばそうと決意を新たにしたりすることができる。それに対して、日本文化コースは留学生対象のコースであり、その留学生は、すでに日本で生活しながら日本語・日本文化を日本の大学で学んでいるのである。本学入学前に1年以上日本語学校で日本語を学んだ学生も多く、その後さらに専門学校で学んだ経験を持つ学生もいる。このような留学生にとって、日本での研修旅行の意味合いは他の2コースとは当然異なってくると考えられる。

日本文化コースでは、欧米文化コースの研修が約1か月に亘り行われるのに合わせ、初回の1993

\* 本学助教授 日本語教育

年度は27泊28日の研修が行われた。しかしながら、1ヶ所滞在型のアメリカでの研修と違い、日本国内では、いろいろな都市を移動しながらの研修となり、実りは大きかったものの大荷物を抱えての大遠征となり、学生側に疲労も見られた。その後、学生アンケートや引率教・職員の意見を参考に94年度は24泊25日に短縮し、95年度は関西での研修と北海道での研修の途中自宅に戻る形を取り、関西・北海道合わせて17泊18日の研修を行った。研修内容も、良かれと思うものはすべて取り入れようとした初年度の研修を、学生にとって意義深く、かつ効果的なものにするべく漸次改善を重ねてきた。

本稿では、まず、本学日本文化コースにおける文化・語学研修の内容を報告するとともにその意義を学生アンケートを手がかりに分析し、次に、他機関の研修旅行の目的及び実施形態を調査報告し、最後に、在日留学生対象の研修旅行の意義・実施形態について考察し、本学での今後の研修旅行をさらに効果的なものにするための改善の方向性を探ることを目的としている。

## 2. 文化女子大学文学部国際文化学科日本文化・日本語研修の実施形態と意義

### 2-1. 企画段階での目標

文化・語学研修旅行を企画する段階で、留学生の日本文化体験で欠けていると考えられるものを補う研修旅行にすることをまず考えた。彼女達はすでに目標文化の中で生活しているわけであるが、日本文化との接触には次のように不十分なところが多々ある。

第一に、日本人の家庭生活を体験したことがない学生が多いことが挙げられる。1992年に行われた本学学生生活調査によると、6割の学生が一人暮らしをしており、同居者がいる場合は兄弟姉妹が多いという結果が出ている。クラスでの聴き取り調査でも4年近く日本に滞在しながら日本の家庭を訪問したことがない学生もいる。第二に、東京という日本の中でも特殊な大都会での生活を日々送っていることが挙げられる。日本文化の理解という観点から、都会だけでなく地方の文化に触れる機会が与えられることが望ましい。第三に、日本語使用の問題がある。彼女達はすでに目標言語での講義を日本人学生と一緒に受講しているわけであるが、その語学力は学生間でかなり差がある。また、同国出身の学生が多いために日本語を使うのは教師と話す時のみというような学生もいる。毎年、新入生を対象に行っている日本語に関する調査でも日本人の友人を持つ学生は少なく、講義中以外は母語で話すほうが多い現状がわかる。帰宅後も、前述したような生活環境の学生が多く、日常会話レベル以上の日本語での話し合いをする機会が極端に限られている。前出の生活調査には日本人との交流では、文化交流(19.1%)、日本人と率直に話し合える交流会(14.7%)、ホームステイやホームビジット(13.4%)を望むという結果が得られている。

このような留学生側の実態を考慮して、1. 日本の歴史文化について理解を深めるための関西地域での見学と講義、2. 日本人の家庭生活について理解を深めるためのホームステイ、3. 日常会話以上の日本語応用の機会を持つことを目標とした各種交流会、4. 地方の文化ということで北海道を取り上げ、そこでの見学研修と講義、を盛り込んだ研修旅行が計画された。

### 2-2. 学生にとっての研修旅行

以上が教師側で予め考えた研修旅行の意義であるが、学生は研修旅行の経験にどのような意義を

## 留学生対象の研修旅行の意義に関する一考察

見出したのだろうか。93年度～95年度の研修後に行われたアンケート調査の結果を、研修中に課した日記の内容、研修後に提出してもらったレポートを参考にしながら分析してみよう。

なお、学生の内訳は93年度は台湾7人、中国6人、韓国1人の計14人、94年度は台湾8人、中国4人、韓国2人の計14人、95年度は、台湾6人、中国5人、韓国3人、香港1人、ベトナム1人の計16人である。

### 2-2-1. 関西での見学研修と講義

研修を通じて日本文化を感じたものは何かという問いに対する回答(記述式)を表1にまとめた。どの年度にも、奈良・京都での研修内容を答えた学生が一番多く、関西での研修は学生にとって印象深いものになっていることがわかる。これは研修旅行前に十分な講義を受けていることと、その地域に造詣の深い教師が説明をしながら研修を行うことが功を奏しているのだと思う。現に、単に引率者が案内しただけであった見学場所については「案内する人がいなかったから良く分からなくて残念だった」という意見を日記に述べている学生もいた。また、説明する人をお願いした年度には見学場所に対する評価が不評から好評に変わった場合もある。留学生の場合、どのようなものでも説明をしてもらうことが満足感につながるようだ。

表1 研修を通じて何に日本文化を感じたか(記述式・複数解答有)

	93年度	人数	94年度	人数	95年度	人数
関西研修関連	奈良・京都の寺	6	奈良・京都の寺	8	奈良・京都の寺	8
	仏教	2	古典芸能鑑賞	2	仏教文化	1
	明日香	1	明日香	1	文化財保存	1
			舞子	1	庭園造り	1
北海道研修関連	地方の風土・習慣	1	開拓記念館	1	札幌の町	2
	札幌の国際性	1				
	外地と内地	1				
交流会関連	天神山交流会	2	天神山交流会	3	華/茶道・着物	2
ホームステイ関連	家庭での生活	5	ホームステイ	1	ホームステイ	1
			日本人の心遣い	1	食べ物	1

### 2-2-2. ホームステイ体験

93年度には、函館で3泊、室蘭で2泊のホームステイが行われた。94年度からは函館でのホームステイを5泊とし、室蘭での研修は省かれた。この変更は研修地域を函館・札幌の二つにすることにより、全行程を短縮するところに主眼があり、学生たちの希望によるものではない。93年度に2ヶ所でのホームステイを体験した学生たちはむしろ、2ヶ所でホームステイを行って良かった(14名中9名)とアンケートに答えている。そしてその理由として、「一ヶ所では日本の生活が代表されない」「比較することができる」などと挙げている。

表1を見ると、93年度には、研修全体を通じて日本文化を感じたものとして5名の学生が家庭で

の生活を挙げているのに対し、94年度・95年度の学生は、2名しかホームステイに関することを挙げていない。「同じ日本でも生活の違いがあり、2ヶ所でのホームステイによってもっと日本の風俗や習慣に触れ合うことができる。」と一人の学生がアンケートに述べているように、93年度の学生は2ヶ所でのホームステイを通し、家庭生活を比較することができ、より抽象的に考えることができたのではないだろうか。「1ヶ所の生活習慣にやっと慣れたのに2ヶ所はまた時間が必要である。」ので、一ヶ所でのホームステイが良いと思うと答えた学生もいるように、新しい家庭に慣れるには緊張感が必要なものである。それが2回あったことにより、家庭生活の印象がより強かったことが挙げられるのではないだろうか。

表2 ホームステイで印象深かったこと<sup>1)</sup>

	93年度	94年度	95年度
家庭生活理解	7	3	1
相互理解	1	1	6
してもらった事	1	0	6
ホストの人間性	0	1	1
型式的賛辞	2	0	1
不満	0	0	1
ホームステイのことを書いた学生の数	11	4	15

印象に残ったものを記してもらった研修後レポートでホームステイについて触れていたものは、44名中30名であった。表2はレポートで述べられている内容をまとめたものである。2ヶ所のホームステイを経験した93年度の学生のレポートには主婦の役割・親子関係・子供のしつけなど家庭での生活（家庭生活理解）に関するものがとても多くなっている。それに対して、95年度の学生のレポートでは、ホスト家族と理解し合えたという感動（相互理解）といろいろな観光地に連れて行ってもらったり、着物を着せてもらったりした事に対する喜び（してもらった事）が大半を占めている。94年度の学生によるレポートは、寺院のパンフレットや旅行ガイドブックの写しと思われる内容のものが多く、ホームステイに関する記述をしていたものは少なかった。

### 2-2-3. 各種交流会

主な交流会として札幌での日本文化交流会<sup>2)</sup>と北海道文教短期大学の学生との交流会<sup>3)</sup>、函館での料理交流会<sup>4)</sup>と学校訪問<sup>5)</sup>(94年度以降)がある。

表3 日本文化交流会は継続した方が良いか

	93年度	94年度	95年度
続けた方が良い	14	14	16
しなくても良い	0	0	0
計	14	14	16

留学生対象の研修旅行の意義に関する一考察

表4 北海道文教短大との交流会は継続した方が良いか

	93年度	94年度	95年度
続けた方が良い	10	12	13
しなくても良い	4	2	3
計	14	14	16

表5 函館での料理交流会は継続した方が良いか

	93年度	94年度	95年度
続けた方が良い	12	14	16
しなくても良い	2	0	0
計	14	14	16

表6 小学校・中学校訪問は継続した方が良いか

	93年度	94年度	95年度
続けた方が良い	—	10	12
しなくても良い	—	2	4
計	—	12	16

これらの交流会は表3～表6の結果が示すようにいずれも継続した方が良いと答えた学生が大半を占め、好評であった。特に表1にあるように研修中日本文化を感じたところとして日本文化交流会を挙げた学生がどの年度にもいることは注目に値する。また、小学校・中学校訪問は行く前は、怖じ気づいていた学生が多かったが、いざ生徒たちの注目に晒されると、かなりの積極性を見せて自国について説明している学生が多く、恰好の発表の機会となっている。

表7 日本語は上手になったと思うか

	93年度	94年度	95年度
上手になった	5	1	4
変わらない	7	11	12
下手になった	2	2	0
計	14	14	16

団体旅行の場合、斎藤と出原（1994）も述べているように個人的に日本語を使う機会が少なくなる。特に本学のように共通の母語を持つ学生が多い場合、東京で一人暮らしをしている時より、終始共通の母語を使う友が身近にいる研修中のようが母語を使う機会が増えるのは当然の帰結といえる。下手になったと思う理由には「あまり日本語を使わないから。」「留学生ばかり集めたから。」

「事前の準備が少なかったから。」などが挙げられていた。日本語使用の機会を補うために上記のような交流会を考え、そこでの発表内容についても事前に準備をしているにもかかわらず、日本語上達という意識とは結びついていない。「どうすれば良いか」という設問には、「ホームステイを長くすれば良い。」「もっと日本人との交流を増やせば良い。」「友達と日本語で話せば良い。」などの意見とともに、「学校でしっかり勉強するしかないと思う。」という意見も得られた。

日本文化と日本語の研修という性格を考えると、日本語が上手になったと感じられない研修というのは、問題があると言えよう。93年度・95年度には、上手になったと感じた学生がそれぞれ3分の1強・4分の1いたが、94年度には上手になったというものが少ない。94年度以降、交流会が1つ増えたことを考えると、交流会への参加は日本語の上達という意識と必ずしも結びついていないことが指摘できる。

#### 2-2-4. 北海道での見学研修と講義

北海道研修ではホームステイのほかに各種交流会も行われ、地域での見学研修にはあまり時間をかけられない。その中で学生の要望も入れ、現在は、1. アイヌ民族の歴史、2. 札幌の街作り、というテーマを意識した講義と見学が行われている。表1を見ると、研修中日本文化を感じたものとして北海道地方の文化理解に関わる項目を挙げた学生は、どの年度にも若干名ずついるが、93年度には多少多い。これは93年度は、函館、室蘭、札幌と研修地も多様であり北海道での研修期間が19泊あったのに対し、94年度からは研修地も函館と札幌のみとなり、期間も短縮され北海道に関する講義も少なくなったためであろう。

学生のアンケートを分析してみると、関西地域での研修については、教師側の意図したような研修として捉えられているが、ホームステイ・交流会は、教師側の意図とは若干ずれてきている。ホームステイは、家庭での生活の理解というよりも日本人と理解し合えた事に対する喜び・無償で何かしてもらった事に対する喜びが強い印象となっており、交流会は「続けた方が良い」とは評価されているが、日本語が上達したという意識とは結びついていない。

今後の改善の方向性を探るために、次に他の機関での研修の実態を調べてみよう。

### 3. 他機関における研修旅行の目的とその実施形態

#### 3-1. 国際文化学科、国際学科、地域文化学科などにおける研修旅行

本学国際文化学科と同様の学科では、研修旅行をどのように位置づけているのだろうか。1995年度版私費外国人留学生のための大学入学案内により、国際文化、地域文化、日本文化などの学科の中から、その学科に5名以上の留学生を94年度に受入れている大学を取り上げ、それらの大学の学生案内などにより研修旅行の有無、行われている場合は、その実施形態を調べた。

調査の結果、留学生のみを対象とするコースを持つのは本学のみのもので、国際文化学部の定員200名のうち60名を留学生枠にしている九州産業大学は別として、他大学ではそれぞれの学科に数名の留学生を受け入れている形態になっている。従って、研修旅行も留学生のみというものではなくなる。研修旅行がカリキュラム上に現れているのは、大東文化大学（現地研修）、九州産業大学（現地実習）、城西国際大学（地域文化研修）、目白大学（臨地研修）、フェリス女学院大学（現代ア

アジア実習・現代ヨーロッパ実習)であった。このうち、城西国際大学と目白大学が研修対象地域として日本国内も挙げているので、この2校の研修方法について見てみよう。

城西国際大学国際文化学科には3年次に「地域文化研修」という2単位の科目があり、講義とともに日本、シンガポール、アメリカ、スペインで、それぞれ10日間現地での研修を行う。地域研修の目的は、地域文化の理解と認識、問題点の抽出とその解明で、日本での研修は地域の実態を体験するために、西・北九州に行く<sup>6)</sup>。

目白大学には、「臨地研修」という2単位の選択必修科目がある。これは、1年次から取れる科目で、国内外において学習研究の方向づけ、外国語の習得、研究課題の解明・検証など、自主的に研修・調査を行うことを目的としている<sup>7)</sup>。学生達は担当教師の指導の下に研修場所(機関)・内容・方法について計画を立て、大学が当該研修機関に受け入れを依頼する形で行われる。研修後には報告書を提出する。地域文化学科の国内での研修・調査項目としては日本の民俗文化、日本の美術・芸能文化、考古学、日本各地の過去・現在・未来、に関するものが挙げられている。ちなみに目白大学同様、団体での研修ではなく学生主体の研修旅行の形態を取っていると見られるものに、大東文化大学(専攻地域の現地研修提携における研修)<sup>8)</sup>、フェリス学院大学(現地の教育・研究機関に属し、当該機関の修了書や成績証明書で単位認定)<sup>9)</sup>の研修がある。

これら学部における日本での研修は、特に留学生対象というわけではないので、ホームステイということは考えられておらず、対象地域の歴史・社会・経済などを総合的に学ぶ形の研修になっていることが指摘できる。さらに、日本人学生にとっても自国の文化をよりよく理解することは、国際文化を学ぶ上で、有意義なものであると考えられていることが分かる。ちなみに、九州産業大学では東アジア・ヨーロッパ・アメリカを研修対象地域にはしているが、まず自国の文化を知ることが方針として挙げている<sup>10)</sup>。

### 3-2. 日本語教育機関における研修旅行

全日制の日本語教育機関では、校外学習、実地見学、インタビュープロジェクト、タスク活動など校外に出る活動も重視されて来ている。日本語教育機関において宿泊を伴い、旅行と名づけられるものはどのような位置づけで行われているのだろうか。

若松(1987)によると、87年現在東海大学別科日本語研修課程では、1泊2日の研修旅行と2泊3日の見学旅行が行われている。日本語学習開始後2か月ぐらいの時期に実施される1泊2日の研修旅行は学生と教師、学生間の親睦を図るために行われ、2泊3日の関西・広島見学旅行は日本事情の「歴史」と関連づけ、修学旅行という意味合いも持たせてカリキュラムに組まれている。

葉(1991・1992)は、九州大学留学生教育センターでの6か月の予備教育日本語研修コース<sup>11)</sup>における教室外研修について報告している。従来学生の緊張を解きほぐすという趣旨で必要と思われた時期に必要なと思われた活動を単発で実施してきたものを、文化研修として位置づけ、統一性のある内容にしていく試みから、教室外研修の日本語教育における重要性を説いている。文化研修は、日本文化を知る、日本の社会を知る、スポーツ及び娯楽、スピーチ大会の4つの収斂されており、本来の目的である日本語の習得を円滑に進めるための潤滑油的働きが認められている。文化研修の中には日本の社会を知る活動の一つとして、1泊2日の研修旅行が設けられており、日本の産

業に目を向けるために造船所や工場の見学と観光地とを組み合わせたと内容になっている。

岡山大学留学生センターの斎藤と出原（1994）も、6カ月予備教育日本語研修コースの研修生に対する1泊2日の研究旅行の実施例を報告し、問題点を指摘している。岡山大学では留学生センターの計画の下に研究旅行を実施しているが、団体旅行であるため、斎藤と出原が研究旅行の意義と考える、A. 専門の研究に必要な情報を得る、B. 日本社会、文化、人々に直接触れ、異文化理解をする、C. 学習した日本語を実社会で使う、が実現されにくい。斎藤と出原は、1泊2日の研究旅行でこれらの意義を全うするための試みを次のように報告している。A に関しては、専門が様々であるため、大学や図書館の情報を与え、自由時間を多くとるようにしている。B に関しては、事前に日本に対する興味や行きたい場所についてのアンケート調査を行ったり、見学先について調査・発表し合ったりして研修生の自主性を重んじ、動機を高める。また、研修中は自由時間を多くとるようにする。C に関しては、旅行中にタスクを課し、日本語応用の機会を与えている。

斎藤と出原は研修留学生を受け入れている国立大学を対象に行った電話によるアンケート調査を分析し、研究旅行には、1. 研修生各自の専門研究を目的とし各自が計画し、各自がそれぞれ実施するものと、2. 目的が日本社会、文化の研究で、主にセンターが計画し、団体で実施するものが半数ずつの割合であったと報告している。内容は知ることができないが、研究テーマの決まっている留学生の場合、日本語のレベルが初級程度であっても、各自の自主性にまかされた研究旅行が可能だということだろう。

長友（1989）は、広島大学外国人留学生日本語研修コースと広島市青少年センターとの共同主催として実施された1泊2日のキャンプの例を報告し、初級レベルの留学生に対しても地域の日本人との交流の中での日本語教育の実践が可能であることを示唆し、日本語研修コースそのものを地域社会を包括したオープン・プログラム「教室内外合体型」にするビジョンを示している。

広島大学の浮田（1990）・難波（1989）・深見（1994）は、日本語・日本文化研修留学生<sup>12)</sup>のためのプログラムと授業について報告している。1年間の研修は、日本語研修、指導教官の下での課題研究、日本文化特別講義・見学プログラムからなる。見学プログラムは日本文化特別講義と連動する形で行われている。この講義は、一回完結のオムニバス形式で行うと時間が短く概説としても不十分なものになってしまい、「日本の伝統芸能」「日本の政治・経済」などの1つのテーマに絞って行くと、その分野に興味のない学生が出てくるなど「日本文化」の紹介のし方の難しさが述べられている。

以上見てきたものは予備教育の日本語教育機関で行われている研修旅行の実施形態である。予備教育では、短期間に大学・大学院での講義についていけるだけの日本語能力をつけなければならないため、研修旅行の期間は1泊2日ないし2泊3日となっている。この短期間で行われる研修旅行の意義としては、第一に、毎日日本語の授業に明け暮れる来日して間もない留学生のためのストレス解消という精神面での意義が挙げられる。異国での生活の不安、日本語授業に関する不安などを和らげるための研修旅行である。第二に挙げられるのは、日本理解である。一人では見学する機会のないであろう場所・機関を実際に現地で見学することを目的とする。第三には、教室内で学んだ日本語の成果を実社会で応用する機会としての研修旅行の意義が挙げられる。第四に、研究テーマ



をはっきり持っている留学生対象の研修旅行には、研究情報収集の意義も考えられる。第五には、一つのコースの終り近くに行われる修学旅行という意義をもつものがある。

### 3-3. 技術研修機関における研修旅行

この他、全体の滞日期間は短く「留学生」対象でもないが、国際交流基金・国際協力事業団においても、様々な形の日本研修が行われており、その中で、研修旅行も実施されているので見てみよう。

国際交流基金で行われている2か月間の外国人の日本語教師短期研修及び中国大学・学院日本語教師研修では、1泊のホームステイと1泊2日の研修旅行が実施されている。

国際協力事業団の日本語教師3か月研修では、東北あるいは関西方面での3泊4日の所外研修と12泊の出身地研修が、1年研修では2泊3日の熱海における演劇教育夏期大学参加、3泊4日の関西方面への所外研修、1泊2日の仙台での所外研修が実施されている。

上述の機関で行われている研修は、限られた期間の日本滞在中になるべく多くの名所旧跡を訪れることと、成人を対象とした短期間での日本語教育を活性化するという意義を意識していると考えられる。

国際協力事業団沖縄国際センターでは、7か月の日本語専修コースの研修員を対象に、94年度には10泊のホームステイを含む大分研修旅行と8泊の関西関東研修旅行が行われている。これは日本語学習への動機づけと実際場面での言語運用能力の向上、日本人と日本文化や社会の理解を目的としている。祖慶（1989）によると沖縄国際センター日本語研修室では、研修旅行をカリキュラムの一環として取り入れているということであり、89年の報告にある長期研修の内容も教室内での学生内容をかなり意識したものになっている。

### 3-4. 海外の日本語教育機関における研修旅行

海外の日本語教育では、教室外で日本人と接して日本語を実際に使用する機会がない事が大きな問題となる。植田（1994）は、タイの大学の日本語科で日本語を実際に使用する機会を与えるために企画された2泊3日の日本人家庭におけるホームステイプログラムについて報告している。その有効性について論じる中で、初めての参加者と2回目経験者を比較し、満足度は2回目経験者の方が高いことを指摘し、ホームステイの経験を繰り返したことが学生に自信を与え2回目の自主的な取り組みが可能となり、さらに大きな満足感を生んだからではないかと考察している。このホームステイは一年の間を置いて行われたものであるが、繰り返しの効果という点で本学の研修の行いかたの参考になると思われる。

## 4. 留学生のための研修旅行の意義

本学を含めて様々な機関における研修旅行の目的と実施形態を見てきた。ここでは研修旅行の目的とその目的に沿った実施形態について考察し、本学文学部国際文化学科日本文化コースの文化・語学研修の方向性について論じたい。

### 4-1. 在日留学生のための研修旅行の意義

研修旅行は単なる物見遊山的な観光旅行とは違い、各機関で様々な目的の下に行われているが、

その目的は、①留学生の精神面に配慮したもの、②日本文化理解（文物・地域全体・人と価値観）、③日本語の応用、④研究のための資料探しの4つに大きく分類できるようである。ここで②の日本文化理解は大きい項目なので、文物、地域全体、人と価値観の3つの下位項目を設定する。以下にそれぞれについてまとめよう。

①精神面に対する配慮：異国で多くの場合家族と離れて生活する留学生の精神面での安定を図るためのもので、来日してまもなく、あるいはそのコースの授業が始まってまもなくの時期に行われる。学生間の親睦を図り一緒に学ぶグループとしての意識を作ったり、学生と教師の親睦を図り、その後の指導の円滑化を図る。主眼が親睦ということもあり、長さは1泊か2泊が一般的である。

修学旅行的な意味合いのある研修旅行も新たな出発に対するけじめということでやはり精神面に対する配慮と考えられるので、ここに分類する。

②-1 日本文化理解（文物）：日本の歴史を知る一環として歴史的建造物、博物館・美術館の見学、社会事情を知るために工場見学や浄水場見学を行ったりするものである。木下ら（1993）が街角ウォッチングという教室外活動の報告の中で述べているように、留学生たちは普通日本人が気づかないようなものに目を引かれ不思議に思っていることが多い。ただ引率するだけでなく、説明が不可欠である。

②-2 日本文化理解（地域）：ある特定地域を対象にその地域の歴史、地理、経済などを総合的に理解することを目的とするもので、講義などを交え、文物の見学にテーマ性を持たせることが大切である。

②-3 日本文化理解（人と価値観）：挨拶をするだけの表面的な付き合いを越えてホームステイをして終日共に暮らすことにより、価値観の違いなどに気づき、理解を深めることを目的としているものである。田辺（1992）は、ホームステイについて一刻一刻が比較対照の生活であり、学習であると述べているが、共に暮らすとそれまで見えなかったことが見えてくるということは、我々も想像のつくものである。

③日本語の応用：留学生の平素の日本語使用の機会を質・量ともに上回る日本語使用場面を与えるところに主眼がある。留学生が平素同じ寮に住んでいる国際交流基金や国際協力事業団の研修生のような場合、団体旅行をしてその先で日本人との交流を企画することにより日本語を話したという印象を学生に与えることができるかもしれないが、一人暮らしをして直接日本社会と接している在日年数の長い留学生の場合、母語話者の多い団体旅行をするということは日本語使用の機会をかえって減らしてしまうことになりかねない。この問題を解消するには、日本人と共に研修旅行に出かける城西国際大学の研修旅行や、広島大学国際交流センターの実施している地元の青少年との交流キャンプのような長時間に亘る交流の機会を与える工夫が必要である。

ホームステイは異文化理解の機会にもなるが、終日日本人と一緒にいることで、日本語応用の場としても大きな満足感を学生に与える可能性を持ったものであり、語学研修という側面も持つ活動である。牧野（1996）も、アメリカの大学生が、日本での8週間のホームステイと日本語学習により、アメリカの大学での1年分に相当する日本語会話力を身につけることを報告し、ホストマザーから半ば母語のようにインフォーマルな日本語を学ぶ効果について指摘している。

④研究資料集め：すでに研究テーマが決まっている学生が平素の居住地以外の場所で資料を収集することを主眼としているものである。本学では今のところ積極的に研修旅行と卒業論文のテーマを結び付ける試みはもたれていないが、研修旅行で見聞したものがきっかけになりテーマを決定したと思われる学生も数名おり、「現代日本人の生活習慣と意識」「日本の国際化について—北海道地域社会を事例として—」「仏教と日本文化との関係について」「箸と日本文化」などという卒業論文のテーマが見られる。

#### 4-2. 文化女子大学の日本文化・日本語研修の方向性

長期に亘る研修旅行を企画する場合、大学全体のスケジュールの他に、受入先や交流相手との調整、宿泊設備の確保、予算、適当な引率者などの要因が存在する。良いと思われるからといってすぐ実行できるものではないが実行可能性を考えずに、これからのめざすべき方向性を考察してみよう。

##### ①関西での見学研修と講義 —日本文化理解（文物）—

内容は、従来通りでよいが、欧米文化・アジア文化の日本人学生希望者にも参加させることが望ましい。日本人学生にとってアメリカ・中国での研修旅行に行く前に日本の古い文化について造詣を深めておくことは有益であるし、留学生にとっては、研修期間に身近に日本人学生と接することができ、日本語での会話の機会を増やすことができる。

##### ②家庭生活体験 —日本文化理解（人と価値観）・日本語の応用—

家庭生活の理解ということ在意義として掲げるのであれば、1家庭を知るよりも、ホームステイを繰り返すことにより2家庭以上について知り、多角的に日本の家庭を紹介する試みが理論的には有効であると思われる。しかし、大学の必修授業の一環としてホームステイを行う場合、前向きな姿勢で臨む学生ばかりではないことも考慮しなければならない。中には年齢が30歳以上の学生もおり、一人暮らしをしている者も多く、ホームステイを気疲れするものと受け止めてしまう者もいるのである。また、3年次に研修旅行が行われることもあり、既に個人で長期のホームステイを体験している学生もおり、ホームステイを全員で繰り返すというのは現実的ではない。現行の短期間のホームステイでの経験を日本人の価値観の理解へと有効に結び付けるためには、事前に日本の家庭生活についての講義を行い意義を明確にし、学生の動機づけを高めることが効果的なのではないだろうか。

日本語学習の効果を追求するのであれば、5泊では短かすぎるだろう。しかし、学生に対するこれまでのアンケート調査からは必修授業として行う場合、5泊が適切な長さであるという結果が得られている。そのために、全員での研修旅行という形にこだわらず、1. 南山大学や早稲田大学のように希望者に勉学の場でのホームステイを斡旋する<sup>13)</sup>、2. 学外団体の行っている長期のホームステイに参加することを奨励し、それを単位として認定するという方向性も考えられるのではないのか。

##### ③各種交流会 —日本語の応用—

本来留学生の生活している場で、種々の交流会を実施することが理想である。現在の形で続ける場合、事前に自国の文化についての発表会を開くなどして、練習を重ねた上で交流会に臨み、日本

語授業の一環として位置づけるようにする工夫が大切である。

#### ④北海道での見学研修と講義 ー日本文化理解(地域文化)ー

関西地域での研修同様、日本人学生からも希望者を募る方が良いと思われる。そして、テーマ性を明確にし、講義と見学を行う。

### 5. 終 り に

文学部開設と同時に文化・語学研修委員会が発足され、文学部の特色を出した文化・語学研修の形態が検討されてきた。3回の研修旅行を経験し、関西での見学研修、北海道でのホームステイと種々の交流会という形に定着してきた感のある日本文化コースの研修旅行を再度見直すことにより、新たな形を模索する手掛かりにしたいと思った次第である。

本学研修旅行の今後の課題としては、1. 地域見学研修に日本人学生も参加できるようにすること、2. 希望者には大学でホームステイを紹介すること、3. 長期のホームステイへの参加を奨励し、単位が取得できるようにすること、4. 日本人の家庭生活についての講義をホームステイの前に行い、家庭生活の理解という意義を明確にすること、5. 交流会での種々の活動を日本語科目に結び付けることなどの可能性を考えていきたい。

今回は取り上げなかったが、他コース同様3年次に研修旅行を行うという時期の問題、関西研修、北海道研修を続けて行うという実施方法などについても今後考えていきたい。また、留学生を多く受け入れている機関との意見交換も積極的に行っていきたい。

学生たちに課している日記・研修後レポートなどから判断して、現段階の研修旅行も学生たちに大きな満足感を与え、大学生活の大きな思い出となっていると理解してはいるが、マンネリに陥らず、より意義深いものにすることを心がけたいと思っている。

#### 註

- 1) 2種類の内容について言及している学生が2名いるので、件数と学生数は一致しない。
- 2) 札幌国際プラザ所属のボランティアの方々に茶道、華道、折り紙、着物の気付けなどを教えて頂く。
- 3) 北海道文教短期大学の学生との茶話会。自己紹介のほか、自国の文化の一端を札幌の学生たちに紹介したり、グループに別れて歓談したりする。
- 4) 北海道国際交流センターにおいて留学生が母国の料理の作り方をホームステイ先のお母さん方に実践をしながら説明し、作った料理を皆で頂くという交流会。
- 5) 小学校あるいは中学校に一日参加する。内容は受入側のクラス担任に任せられているが、学生たちは、自分の国の紹介をしたり、生徒たちからの質問を受けたりする。
- 6) 城西国際大学 1994 『案内』 p. 29 『講義要項』 p. 173
- 7) 目白大学 『授業計画 1994年』 p. 98
- 8) 大東文化大学 1995 『Crossing』 p. 62
- 9) フェリス女学院大学 1994 『年間授業計画書』 p. 334
- 10) 九州産業大学 1995 『大学要覧』 p. 49
- 11) 来日した研修生が各大学の大学院に進む前に集中的に日本語学習を17国立大学で行うものであり、研修生には1泊2日の研究旅行のための旅費が支給される。

留学生対象の研修旅行の意義に関する一考察

- 12) 文部省から奨学金を受け、各国の大使館及びその他の公館によって推薦される学部レベルの研究留学生で日本語及び日本文化に関するテーマについて一年間研究と研修をする。
- 13) 田辺洋二 1992 「ホームステイを考える」『留学交流』4-2 p. 23

参考文献

- 植田栄子 1994 「海外日本人家庭で行うホームステイプログラムの有効性—タイにおける日本人学習者の場合」『世界の日本語教育—日本語教育事情報告編—』2
- 浮田三郎 1990 「日本語・日本文化研修留学生のためのプログラムと授業」『広島大学留学生センター紀要』第1号
- 木下恭子他 1992 「校外学習ウォッチング」『文化外国語専門学校紀要』第6号
- 国際協力事業団沖縄国際センター 1994 『平成6年度日本語専修(A)(B)コース実施要領』
- 斎藤美智子・出原節子 1994 「研究旅行の実施例と問題点」『岡山大学留学生センター紀要』第2号
- 祖慶壽子 1989 「野外研修」『国際協力事業団・沖縄国際センター研修紀要』第1号
- 田辺洋二 1992 「ホームステイを考える」『留学交流』4-2
- 長友和彦 1989 「『日本語研修コース』教育論(1)」『留学生日本語教育に関する理論的・実践的研究』広島大学教育学部
- 日本国際教育協会 1994 『私費外国人留学生のための大学入学案内 1995年度(前期)版』大学通信
- 日本国際教育協会 1994 『私費外国人留学生のための大学入学案内 1995年度(後期)版』大学通信
- 日本国際協力事業団 1991 『日本語教師研修記録』第12回
- 日本国際協力事業団 1990 『現地日本語教師の本邦研修記録』第11回
- 深見兼高 1994 「日本語日本文化研修プログラム」『広島大学留学生日本語教育』第7号
- 牧野成一 1996 「ホームステイにおける日本語学習効果」『日本語教育・異文化間コミュニケーション』H. I. F.
- 葉 照子 1992 「九州大学日本語研修生コースにおける文化研修について(その2)」『九州大学留学生教育センター紀要』第4号
- 葉 照子 1991 「九州大学日本語研修生コースにおける文化研修について」『九州大学留学生教育センター紀要』第3号
- 留学生指導特別委員会 1991 『留学生生活調査』文化女子大学教務部
- 若松一郎 1987 「留学生のための課外活動」『東海大学留学生教育センター20年史』東海大学